

本会の設立記念日 6月7日について

長崎史談会 会長 原田博二

本会は、昭和3年に設立され、本年で85周年を迎える。しかし、その設立の日について、5月26日、6月7日など諸説があった。しかし、昭和3年6月9日の『長崎日日新聞』には、「長崎史談会発会式 会員を募集」の見出しで、本会の発会式の記事が掲載されている。記事には、「長崎史談会幹事会並びに発会式を七日午後五時より西濱町精洋亭別館に於て開催、佐藤会長、林、小川、渡辺、蒲原、川淵、津田、大庭、丸山、瀬戸崎、藤木、神代諸氏の各幹事出席会則並に趣意書の件其他に就て協議を遂げ、終つて発会式に移り永山県立長崎図書館長、武藤長崎高商教授、史家古賀十二郎諸氏の各顧問臨列、佐藤会長の挨拶、増田幹事よりの創立経過報告ありて食卓に着き食事後談話会に移り、各顧問の祝辞に兼ね研究上の指導注意を弁へ、一二研究問題に就て意見交換を為し、最後に永山館長の発声にて史談会の萬歳を三唱し、十一時過ぎ散会した。因に同会では時々研究発表会、講演会、臨地講演会、史蹟見学、史料保存、図書刊行等其他の事業を行ひ、会務並に会員の研究等は同会発行の『会報』及び代用機関誌『長崎談叢』に於て発表すべく、近く会員の募集を為し文化史研究の一般化を図ると、尚ほ事務所は当分榎津町七番に置くと」とある。

以上のように、本会は、昭和3年6月7日に発会式を行い、発足したのである。ちなみに、5月26日というのは、県立長崎図書館において開催された発起人会の日にちであった。

顧問は、記事では県立長崎図書館長永山時英、長崎高等商業学校教授武藤長蔵、史家古賀十二郎とあるが(同日の出席者)、設立趣意書によると、ほかにも県知事伊東喜八郎、長崎市長富永鴻、東京帝国大学名誉教授呉秀三、長崎医科大学教授国友鼎、史家福田忠昭、内務省地方局長(前県知事)佐上信一、京都帝国大学教授新村出、会長は県学務部長佐藤正俊、幹事は林源吉、小川三樹、渡辺庫輔、蒲原春夫、川淵栄蔵、津田繁二、大庭耀、丸山敏雄、増田廉吉、瀬戸崎半吾、藤木喜平、神代祇彦と壮うたる面々であった。

前述の設立趣意書、これは発会式後の昭和3年7月に作成されたものであるが、これには本会発足に当たつての理想と理念が綴られているので、少し長いが参考のためにそのまま掲載する。

「長崎を単なる都市として見る時それは決して大でない

かも知れぬ。併しこれを歴史の殿堂として考ふる時其処には無限の大きさと内容とを発見することが出来る。この長崎が有する歴史的大きさと内容とは臈(やが)て長崎が世界の史都として尊重され注目せらるる所以(ゆえん)ではあるまいか。由来世界各地からするエトランジエーが必ず此処に低徊久しうするのも偏にこの理由に外ならないのである。歴史は永遠に長崎を語り長崎を導くものである。同時に誤りなき長崎の歴史は世界の文化史を解決する上に決して見逃すことの出来ないものであることを信じて疑はないものである。私共はこの意味から云つて今日長崎の地に此種研究の相互機関なく共同助勢なきを遺憾とすること久しい。このことなくて徒(いたず)らに長崎を論議し長崎の成長を企画せんとするのは決して当を得べきものではない。それは決して真の長崎に忠実なる所以でないからである。私共はこの点に就て大いに感ずる所があり茲(ここ)に長崎史談会なるものを組織して先ずこの誤りなき長崎史の研究に向つて歩を進めたいと思ふものである。昭和三年六月」

一体、どなたの文章であろうか、実に遠大なる理想、理念である。この「誤りなき長崎史の研究に向つて歩を進めたい」は、実に同感である。

なお、会則は8条からなり、第1条と第2条には「第一条 本会は長崎史談会ト称シ長崎ヲ主トシタル史的探究ヲ行フヲ以テ目的トス」、「第二条 本会ハ前条ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ 一、談話会、研究発表会、講演会 二、雑誌並図書ノ刊行 三、其他必要ナル事項」とある。また、細則摘要には「一、本会員ノ会費ヲ月額金二十銭トシ、年二回ニ前納スルモノトス」とある。月額20銭であるので、年額にすると、2円40銭、現在の3000円くらいであろうか。

また、細則摘要に「二、随時会報ヲ発行シ、尚ホ『長崎談叢』(季刊)ヲ代用機関雑誌トシ会員ニ無料配布ス」とある。現在、本会が発行する『長崎談叢』の創刊号は、昭和3年5月15日に発行されたもので、編輯者神代祇彦、発行兼印刷者藤木喜平、発行所長崎文献社(長崎市榎津町7番地)で、定価50銭とある。50銭は、現在の500円くらいか。ちなみに、榎津町7番地は、現在の藤木博英社の所在地である。



左のデザインは長崎史談会バッジの原作者・林源吉先生が開港記念マーク懸賞募集に当選されたもので、港を開く鍵を啞えた鶴の図案。長崎史談会バッジの原型の様ですね。